

入選

テーマ：やさしさと社会、そしてわたし

「私のグラウンドマザー」 〜超高齢化社会を共に生きる〜

沖縄県・沖縄尚学高等学校2年 延総史

超高齢化社会の到来。老人医療費は2008年度の11・4兆円から2025年度には24・1兆円にまで増加する見通しだという。

前途多難である。だが、これは明らかにわれわれ若者の問題。世の中のお年寄りをわれわれが救わなければならない。ではどうすれば解決できるか。難しい問いである。答えはないのか。いや、ある。

そのときに、最も大切なことは私たちの意識を変えること。お年寄りを好きになり、尊敬し、その生き様と知恵、人間的な豊かさをわれわれ若者が謙虚に学ぶこと。そう、私は考える。そして、具体的なその答えは…。

私は沖縄の伝統芸能や文化を学びたくて、高校生になるのを機に、ひとり沖縄に移り住んだ。この場で、私が日本全国、いや、世界中に発信したい「沖縄の心」、それが、前段の答えである。その心とは、「ゆいまーる」と「いちゃりばちよーでー」。

「ゆいまーる」。それは「助け合い」。那覇を代表する繁華街・国際通り。今や、郊外のショッピングモールや大型スーパーに押され、観光客は別にして、地元住民は好んで行かなくなってきた。ましてや裏通り。人気の少ない桜坂という通りに、自家製天ぷら、ハンバーガー、かき氷などを売っている個人商店がある。私はここが大のお気に入り。90才の店主・平識ツル子「おばあ」（沖縄では尊敬の念をこめておばあさんをこう呼びする）から、天ぷらをほおばりながら、ウチナーグチ（沖縄言葉）を学び続けている。店に入ったとたん、毎度、おばあが優しい笑顔で「いらっしやいー」。帰り際にも優しい笑顔で「またいらっしやい」。その笑顔がくせになり、何度も足を運ぶ。おばあとのユンタク（おしゃべり）は、私の心を落ち着かせ、和みをもたらす。いつ

しよに三線を弾いては沖縄民謡を歌い、時には楽しく踊る。それにつられて観光客も常連さんもいつしよに歌い、また踊る。まさに沖縄の優しさの文化。

69年前の沖縄。「民間人も巻き込んだ熾烈極まる地上戦」「本土決戦のための時間稼ぎの捨て石」「鉄の暴風」。おばあは、凄惨極まる沖縄戦を生き抜いた。「戦前・戦中もそうだったが、戦後は米軍に占領され、とにかく沖縄は貧しかったさあ」とおばあ。そのおばあがいつも、私に向かつてこう教える。「ゆいまーるは大切さあ。今はそんなのないもんねえ。お前はお前。俺は俺だよ。沖縄の人々はみな、戦後を助け合って生きてきたのだ。

「いちゃりばちよーでー」。それは「出会ったら皆兄弟」。沖縄戦で従軍看護隊だった元白梅学徒隊、85才の中山きくさんから学んだ。

私は、白梅学徒隊の足跡ガイドを行っている。そのため、毎年6月23日、沖縄慰霊の日には、白梅学徒の慰霊祭に参加する。だが今年は、とても心配なことがあった。それは、私たちと交流するために来沖していた元アメリカ兵で沖縄戦を戦った男性が、慰霊祭に参加すると言うからだった。歴史をさかのぼればきくさんたちの敵だ。きくさんにとっては親友を殺した鬼なのだ。いつも優しいきくさんが「誰が連れてきた！ 帰れ」と怒るかもしれない。そう思うと、なにかとんでもないことが起こるのではと不安だったのだ。

私の予想はみごとにあたった。とんでもないことが起きた。きくさんは男性に近寄りなり「あなたは私の兄弟（姉妹）です」と言い、笑顔で肩を組んだ。さらに、式典のきくさんのスピーチに驚かされた。「今日は私の兄弟（姉妹）が来ています」と紹介し、男性は拍手に包まれた。まさに「いちゃりばちよーでー」。きくさんの寛大さに体がしびれた。

二人のおばあは、まさに愛すべきスーパーグラウンドマザー！ 超尊敬すべき超高齢者。この「日本の宝」から若者がもっと謙虚に楽しく学び、暮らして生かす。救うつもりが救われる！ 「二人」はあなたの近くにもきつというはず。こう考えると、日本の未来は明るい！ はずだが、みなさん！ そう思いませんか？